

4. 農学部生産環境科学科における複数コース制の現状と課題

新潟大学

自然科学系：農学部担当 箕口 秀夫

それでは、私からお話をはじめさせていただきます。後のかた、私の声が十分聞こえていますでしょうか？それではこの程度の声の大きさでお話をします。

今日私に与えられたテーマは、ここに書いてありますように農学部・生産環境科学科における複数コース制の現状と課題ということです。

これまでお話された先生は、この後に話す内容のコンテンツがちゃんとでてきたのですが、私の場合話す内容があまりありませんので、コンテンツを出すときどくなってしまう。そこで表題だけで説明をさせていただきますが、ポイントは生産環境科学科は、1つの学科の中に4つのコース、複数のコースを1つの学科のなかに設けていますが、どうしてそのような組織になっているのか？という履歴と課題です。

まもなく番組は終了するようですが、NHKのプロジェクトXをイメージして下さるとわかりやすいのですが、現在の組織、体系ができあがったプロセスについてお話しをします。その後現状でどのような問題をかかえているのか？についてお話をさせていただきます。

現在農学部では「FA宣言」をキャッチ・コピーとして学部の紹介をしていますが、学部には3学科11コース1センターがあります。ちなみに、FA宣言というのは若い人達にFA宣言をしてもらって農学部に来てもらおうということですが、先生方は逆に自由契約になるのではないかと心配があります。新潟大学農学部は、今言いましたように、3学科11コース1センターで、ここに示した学科があります。これが生産環境科学科です。もちろん現在はこのように3学科11コース1センターで運営されていますが、いろいろな紆余曲折を経てこのような組織になっていますので、その過程について簡単に説明させていただきます。

1991年に農学部の改組がありました。改組以前は農学科、林学科などの5つの学科と2つの附属施設がありました。改組後学科の構成が現在と同じになりました。この頃は新潟に限らず全国で色々な大学の改組が行われた時期だと聞いております。ちなみに、その頃私は大学におりませんでしたので耳学問になりますが、農業生産科学科、応用生物化学科、そして生産環境科学科の3学科です。これらの矢印が示すように、5つの学科からいろいろ何が動いて3つの学科に統合されましたが、何がベースになっていたのかという

と、この時の改組では講座がベースでした。そのため例えば、私が卒業した林学科にはいくつかの講座があったのですが、大部分は生産環境科学科に移っていますけれども、一部は農業生産科学科や応用生物化学科に移動しています。あくまでも講座を単位として学科、講座の相互関係の中で決まっていたというのが正直なところではないかと考えています。

その後丁度10年が経ちました。まさに10年一昔という言葉で語られるように、10年経って一区切りで2001年にまた改組がありました。このときの改組ではこのようになりました。実は、学科も、枠組みも変わっていません。変わったところは附属施設が1つになったことです。そのため、この改組は1991年の改組と比較したら改組の規模は非常に小さいだろうと考えがちです。しかし個人的には、1991年より2001年のほうが、より大きな改組だったのではないかと理解をしています。

それは具体的にどのようなことなのかということになりますが、生産環境科学科に注目して下さい。生産環境科学科は1991年改組により3つの講座ができました。それが、2001年の改組ではなんと生産環境科学講座という1講座になりました。学科と講座の名称が一緒というのは所属を書く際に少し間抜けな感じがしてしまうのですが、いずれせよ、講座は1つになりました。

では、講座が1つになったかわりに何か新しい組織ができたのか？ここが重要ですが、ここに示した4つの専修コース、学生が所属する教育のためのコースが4つできました。では、何故4つのコースが出来たのか？ということが重要なポイントになってきます。それを説明する上で、農学部で当時どんな事を考えていたのか？ということが重要ですので、それについてお話を進めさせていただきます。

2001年における農学部の教育組織改組の目的は、ここに書いてある3つです。社会的要請に対応した教育体系の構築、新しい教員組織の構築、そして新しい教育システムの構築です。具体的な作業として学部改組検討委員会で、大体このようなときにはなんと委員会というものができますが、かなり集中的な議論をしました。その中で、例えば社会的要請に対応した教育体系の構築に関しては、明確な教育目標を設定しまし

た。要は、「教える側の意志をちゃんと統一しておきましょう。」ということです。付加価値を明確にし、学生達、学ぶ側の目標もきちんと決めておきましょうということになります。それを支える意味で農場と演習林の2つの附属施設が発展的に統合されました。あくまでもこれは、教育を上手く進めていくためのひとつの手段として発展的統合があるというふうに理解をすべきだと考えています。

その他に、新しい教員組織の構築、教育システムの構築について大きく2つのことが考えられました。

ひとつは、研究と教育のシステムを分離することです。そのためには、教員は専修コースに所属しないという考え方が必要です。これについては、またあとで詳しく説明をします。そしてもう一つは、教育内容が教員の得意な研究分野だけに偏らないよう、各学科に複数の専修コースを設けるとことです。その結果、生産環境科学科では、まず学科としてのアイデンティティー、もしくは学科としての理念がまず必要だということで、ここに示した「食料生産のための基盤整備と情報ネットワークの活用」ですとか、「持続的な地域環境と地域生態系の創出」といったことに焦点を合わせた教育をしていくことを学科全体の議論の中で絞り込んでいきました。

それを受け、地域の環境と生産活動を支える新しい技術者養成プログラムを立ち上げることになりました。先程は農学部の中でどんな議論があったのかというお話をしてきましたが、ここでは学科の中ではどんな議論がなされてきたのかということをご紹介します。生産環境科学科では先程紹介した理念に合わせ、4専修コースを設定することになりました。

このコースの設定に関して、学生アンケート等を学部でやってきましたので、その結果を参考にしたり、農学部の場合はやはり応用科学ですので、現場とのいろいろなやりとりの中で実際の現場ではどんなことが必要とされているのかという議論を通したりして、結局4専修コースを設定することで落ち着きました。

次にコース主任会議を設け、非常に重要な教育目標、教育カリキュラムの案を作成しました。当然、教育目標、それを達成するための教育カリキュラムの案が、4専修コース分できてくるわけですが、それらについて、「私の専門とはあまり関係ありません。」「私は興味ありませんよ。」「だから、適当に決めてください。」ということではなく、学科の全教員が参加するワークショップを集中的に開催しました。そこで、4専修コースごとに、どのような教育をしていくのかという真摯な議論をしてきました。

その結果、コースの教育目標を設定するための出口論の明確化、合理的なカリキュラムとするためのコース授業科目の整理統合と新科目の設定が行われました。コースの教育目標設定に関しては、例えば「4年間勉強したら社会のどういうところで活躍してもらいたい

のかということをはっきりさせておきましょう。」というような議論をしまし、生物生産情報工学コースでは2年生、3年生ではこのような授業科目と内容が必要でしょう。」というような各専修コースの出口論に合わせた学習内容をきっちり話し合っていました。そして、これまでの講座ベースからコースベースの教育へ移行していく過程で、複数コースにおけるカリキュラムの組み立てはレディ・メイドとオーダー・メイドの中間程度にあるのではないかと考えました。

つまり、最近では学生が履修する科目の自由度を高くすることが主流になっており、学生が自由に好きな科目を履修できるということもカリキュラム設定の1つの選択肢として考えられます。しかし、学習教育目標、もしくは出口論を絞ることにより、ある程度カリキュラムも絞り込まれ、履修できる科目、履修すべき科目が決まってしまう。そこで、個々の科目を組み合わせる自由度が少なくなることを、4つの専修コースを設けてコース選択の自由度を高めることでカバーをしていこうと考えました。科目履修の自由度が高い方式は、食事であれば“バイキング方式”ですが、生産環境科学科の方式は“定食”になります。ただし、メインのおかずが焼魚の和定食、酢豚の中華定食、そしてステーキの洋定食というようにいろいろな定食から選べるようなカリキュラムを作っていきたいと考えました。

次はそんなコース教育の流れを説明します。学生を募集する際の単位は学科ですので、受験生は生産環境科学科を受験することになります。そして、入学した学生は1年間は生産環境科学科の学生として勉強した後、専修コースを選択します。つまり、1年から2年の間に専修コースを選択して、2年生になるともう各専修コースに所属して勉強することになります。その後、コースの変更も認められていますが、3年の第2期には卒論指導の先生を決めて、卒論を意識しながら勉強をすることになります。

私たちは、もちろん、それぞれの専修コースに分属してからの教育がとても重要だと考えました。しかしそれとともに、1年目の教育、初年次教育をどのように考えていくのかということにもかなり腐心をしました。1つの学科の中に専修コースが4つありますので、各コースの独自性があるのですが、それに加えるべき学科のアイデンティティーをどうするのか、もしくは2年次以降のコース教育をスムーズに進めてゆくための初年次教育をどうするのか、ということ学科全体で議論しました。

初年次教育の枠組みとして、スタディスキルズがあります。これは学科、学部独自ではなく、全学で取り組んでいますが、学科独自でそのスタディスキルズとコラボレートした情報処理演習を開講しています。また、学部で地域交流サテライト実習を行っていますし、

各専修コースの内容を紹介する概論もあります。

この初年次教育の枠組みを、「スタディスキルズ」と「情報処理演習」が学習スキルに関する科目、「地域交流サテライト実習」と「コース概論」は学生が4年間学んでゆくためのモチベーションに関する科目、そしてそれらが一体化して専門教育へソフトランディングをするということから、その頭文字をとってスマート計画と呼んでいます。

もう少し具体的な内容を、新入生ガイダンスで使用するパワーポイントで説明します。1年の1学期はまずウォーミングアップですので、スタディスキルズなどの科目を履修し、専修コースにこだわらず幅広く勉強してくださいとガイダンスします。例えば、スタディスキルズは一人前の大学生になるための科目で、半期終了時点でプレゼンテーションがしっかりとできるし、情報処理もできるようになりますと紹介します。地域交流サテライト実習は、多分皆さんは初めて耳にする科目だと思いますが、1年生をさまざまな農学の現場に連れ出そうという授業です。例えば、新潟県は皆さんご存知のように農業県ですが、コシヒカリを作っている現場がどんな場所なのか、生産されたお米からおせんべいはどうやって作られているのかということを知りません。また、私の専門では、今、森林はどんなことに病んでいるのか、それは何が問題なのかというようなことを、入学したての学生に考える機会を提供し、これからどんなことを考えながら勉強して行けば良いのかということをしっかり理解してもらおうという授業です。すなわち、疑問、そして発見を学びの衝動にかえていくための科目です。

1年生の2学期になると、今度はコース選択を視野にステップアップをするために、それぞれのコースの中で共通性の高い科目を開講しています。大学でやりたいことは何なのかをじっくり考えながら、この半期を過ごすことになります。

2年生以降は、各専修コースに所属して勉強していきます。各コースには全て学習教育目標が定められており、その学習教育目標をベースにカリキュラムが組み立てられています。学生もそれにそって勉強していきます。具体的なカリキュラムはこの表のようになっています。学習教育目標毎に、どのような科目の組み合わせでその目標が達成できるのか？付加価値がついてゆくのか？ということを知りたくて、学生にしっかり理解してもらいます。また、私たち教員も学習教育目標、それを達成するためのカリキュラム、すなわち科目の流れを十分理解した上で授業をしていきます。

それでは、このような複数の専修コースを支える組織にどのようなものがあるか説明します。まず、コース会議があり、コース会議の長がコース主任となります。そしてコース主任の会議があります。このコース主任会議の下に学科の教育改善を支える様々な組織があります。ここでひとつ強調しておきたいのが、この

コース会議のメンバーです。コース会議のメンバーを決める基本は、カリキュラムです。カリキュラムは、各専修コースの学習教育目標を達成するために必要な科目で成り立っており、当然のことながら、その科目を担当する先生がいます。そしてその科目を担当する先生は、当該コース会議に出席しなければなりません。また逆に、あるコースではカリキュラムのコアになる科目をいっさい担当していない先生もおりますが、その先生もオブザーバーとして参加することができます。したがって、一人の先生が1つのコース会議に出れば良いというわけではなく、複数のコース会議に出なければならないことになります。実際、先生によっては3つとか、4つコース会議に出ているのが実状です。

その他に学科全体を統括する科内会議があります。あくまでも4つの専修コースを運営していくのは学科です。そのため、コース会議で議決し、あるコースだけが単独で何かを実行するということのごく稀で、コース主任会議で議論し、そして更に調整をして学科全体で考え、実行に移していくことになります。

そのため、コース主任会議がとても重要です。毎年、コース主任会議の代表者である議長の先生がおられるのですが、私どもの学科ではコース主任会議の議長は影の学科長と呼ばれ、教育に関しては、ある意味、学科長よりも重要な役割を担っているといえるかもしれません。コース会議とコース主任会議、そして科内会議、このシステムを通して私達は、教員が専修コースに属しているわけではないのだという意識を強く持とうとしています。

これは学生への説明に利用しているスライドですが、私達はスタッフです。そして専修コースは学生が選択する学習プランです。そして、私たちスタッフはこのように複数の専修コースの教育にかかわっていきますよということを、学科の教員は強く意識しています。また、卒論指導教員の決定が、3年の第2期に行われます。この卒論指導教員や卒論テーマについても、専修コース選択同様、学生主導で決められています。学生は、所属するコースにかかわらず、コース教育に関わるテーマであれば自由に教員を選ぶことができます。学科の教員であれば、どの教員に卒論指導をしてもらってもかまわない。さらにそれだけではなく、他の学科とか他の学部ということも可能にしていきたいと考えています。

今ほど説明したコース会議ですが、コース会議において具体的にどのようなことをやっているのかについて説明します。コース会議では、当該専修コースのカリキュラム、授業内容やシラバスについて検討、改善を行っています。そして、関連各教科の成績評価の確認、学習教育目標達成度の評価、そしてプログラム終了の判定についてもコース会議で行っています。このように、コースの様々な重要な事項を決めていくのですが、その過程において科目等の属人性を排除してい

こうということを強く意識しています。

これからシラバスの締め切りが段々近づいてきますので、皆さんの中にはだんだん気が重くなっている方もおられると思いますが、私達は締め切りよりもかなり早い時期にシラバスを書かなければなりません。それは、事前にコース主任にシラバスを提出し、コース会議においてコース関連教員全員で提出されたシラバスについて、体裁だけでなく、授業の内容、評価方法の確認をするためです。それと同じように、担当教員ひとりですべて勝手に成績をつけ、それを入力することはできません。担当教員が成績評価をした後に、コース会議を開催し、レポート、答案などを整理した授業ファイル等をもとに、学生一人一人が本当に学習教育目標を達成できたのかどうかについて教員全員で確認をします。

学科の教育システムの機能を高めるため、例えば、授業公開を実施しています。授業公開は授業能力の向上のためでもあります。教員相互に授業内容の確認・調整をする目的もあります。さらに外部評価です。社会のニーズから考えて個々の授業の内容、さらにはコースの学習教育目標が適切なのかなどについて外部評価を受けています。更に、4つの専修コースは技術者教育プログラムであると標榜していますので、外部評価のひとつとして、昨年2004年度に、4つの専修コースのうち2つのコースでJABEEによる技術者教育プログラムの認定審査を受けました。そして2つの専修コースとも、幸いなことに、技術者教育プログラムとして認定を受けることができました。もちろん、JABEEによる評価が社会全体の評価のどの部分についてどの程度を反映しているのかという議論は必要ですが、折に触れ、外部からの評価を受けていく取り組みをしています。

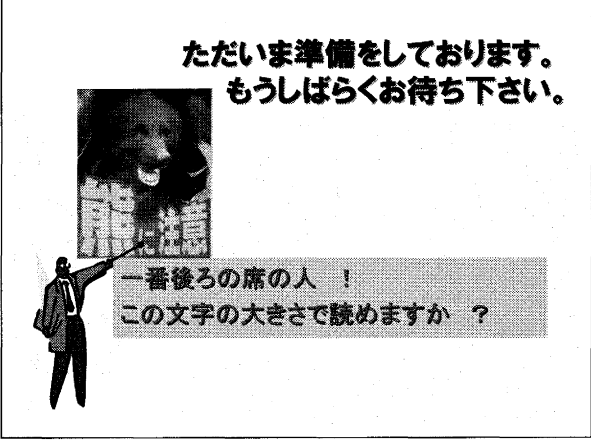
最後に、今後の課題に移ります。丁度今年の3月に新しいカリキュラムの学生が卒業しましたが、これは生産環境科学科の進路状況です。詳細にみていくと課題もありますが、それぞれの専修コースが当初目的としたところに大体落ち着いているのではないかと考えています。

これは、学科の就職担当の先生が作成したスライドをお借りしてきたものです。ここで、就職試験に対して本学科の有利な点、不利な点が整理されていますが、これがまさに、これからの課題に結びついています。まず、カリキュラムの整備が一応進んでいますが、学科の教員は減少します。そして、就職状況は好転しつつありますが、公共事業は減少しています。これは、公共事業ではなくて公務員と読み替えることができます。公務員の募集はどんどん減ってきています。これらについての対応が、学科の大きな課題になっていくと考えています。

すなわち、学科教員の減少をふまえてカリキュラムの整備をどう進めていくのが課題になります。例えば、学科に入学する学生は毎年50人強ですが、それらの学生がどの専修コースを選んでいるのかをみると、かなり偏りがあります。もちろん、それぞれのコースの学生数を均等にするという分属方法もありますが、私達は均等にするのではなく、学生の希望を可能な限り尊重することを優先しているため、偏りが生じています。そのため、入ってくる学生達の要望に臨機応変にどう応えていけばよいのか、それに合わせてカリキュラムをどう考え、整備していけば良いのかということが大きな課題のひとつだと思います。

更に、志願者の減少傾向、すなわち受験倍率の低下への対応があります。学科では教育についてそれなりの努力をしているのですが、その努力をどのように伝えていったら良いかということです。もちろん、良い学生を社会に送り込みことで評価されることが本筋であり、比較的取り組みやすい方法でもありますが、とりあえずこれから入学しようとしている人達に私達の教育についてどうやって伝えていったら良いのだろうかという暗中模索の状態が続いています。

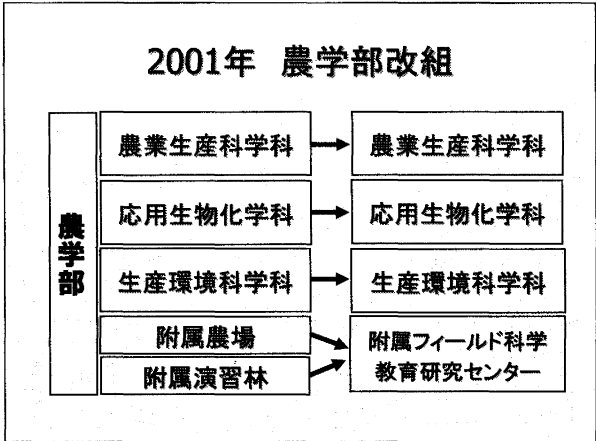
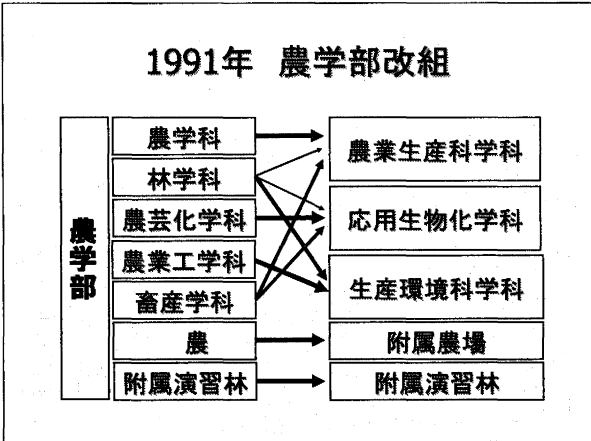
これは2001年の農学部教育組織改組の目的を示していますが、実はこの目的は変わっていないと考えています。つまり、全く同じことが今も私達に問われていて、私達自身が教育プログラムと一緒に変化し続けられるのかどうかということが、一番の課題でないかと考えています。どうもありがとうございました。



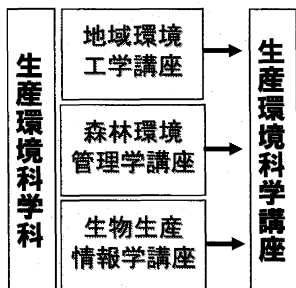
農学部生産環境科学科 における
複数コース制 の **箕口秀夫**
現状と課題 **自然科学系・農学部担当**



- 新潟大学農学部の沿革**
3学科 11コース 1センター
- ▶ **農業生産科学科**
 食料・資源経済学／植物生産
 動物生産学／地域総合農学
 - ▶ **応用生物化学科**
 分子生命科学／生物資源科学／食品・栄養科学
 - ▶ **生産環境科学科**
 生物生産情報工学／生態環境科学
 地域環境工学／森林管理科学
 - ▶ **フィールド科学教育研究センター**
 企画交流部／耕地生産部／森林生態部

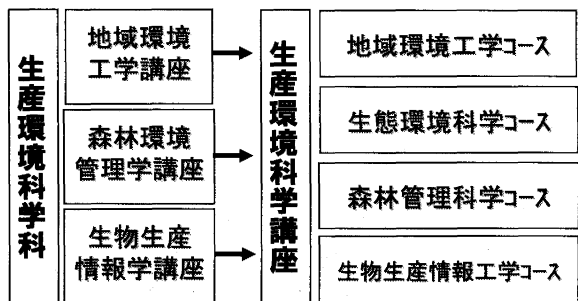


2001年 農学部改組



2001年 農学部改組

専修コース



2001年度 農学部 教育組織改組の目的

- 社会的要請に対応した教育体系の構築
- 新しい教員組織の構築
- 新しい教育システムの構築

教育体制の整備に関する集中的議論 学部・改組検討委員会


- 社会的要請に対応した教育体系の構築
 - 新しい教員組織の構築
 - 新しい教育システムの構築
- 明確な教育目標を設定(教える側の意思統一)
- 付加価値を明確に示す(学ぶ側の目標)
- 農場・演習林の発展的統合
 - フィールド科学教育研究センター

教育体制の整備に関する集中的議論 学部・改組検討委員会

- 社会的要請に対応した教育体系の構築
 - ▶新しい教員組織の構築
 - ▶新しい教育システムの構築
- 研究と教育のシステムの分離
 - 1学科1大講座
 - 教員は教育コースに所属しない
- 得意な研究分野に偏らない教育
 - 各学科に複数の教育コースを設ける

生産環境科学科の理念

地域の自然環境と調和した
農林業の生産活動を
持続的に発展させるために、



食料生産のための
基盤整備と情報ネットワークの活用

持続的な森林環境と
地域生態系の保全と創出

に焦点をあわせた教育を行う

生産環境科学科の教育目標

地域の環境と生産活動を支える
▶新しい技術者養成プログラムの立ち上げ

生産環境科学科における 教育内容の検討、学科・改組準備

- 4コースを設定
- コース主任会議が教育内容の素案を作成
- 学科全体で各コースの教育内容の素案を検討するための集中的なワークショップを実施
- コースの教育目標を設定(出口論の明確化)
- コースの授業科目の整理統合と新科目の設定

生産環境科学科における 教育内容の検討、学科・改組準備

- 4コースを設定
- コース主任会議が教育内容の素案を作成
- 学科全体で各コースの教育内容の素案を検討するための集中的なワークショップを実施
- コースの教育目標を設定(出口論の明確化)
- コースの授業科目の整理統合と新科目の設定

進路

生物生産情報工学
ソフター・公務員(農業・農業土木)

地域環境工学
公務員(農業土木)・建設・設計コンサル

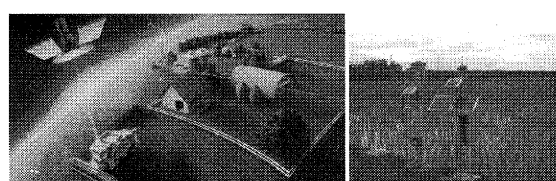
森林管理科学
公務員(森林系)・緑化造園企業

生態環境科学
環境調査関連企業・公務員(自然環境系)

大学院進学

生物生産情報学コース

情報技術の活用により人と自然に優しい農業技術の自動化と農業生産から食品加工までをトータルシステムとして設計できる技術者を育てます。



地域環境工学コース

農地の生産力を高め、農業地域の環境を守り育てる技術者を育成します。



森林管理科学コース

森林資源の充実を図り、地球温暖化の抑制、水源の涵養、生物多様性の維持に貢献する分野で活躍できる“フォレスター(森林管理技術者)”を養成します。



生態環境科学コース

野生生物の管理や酸性雨の影響を分析・評価し、自然生態系の機能を回復させるための環境技術者を育てます。



生産環境科学科における 教育内容の検討 学科・改組準備

- 4コースを設定
- コース主任会議が教育内容の素案を作成
- 学科全体で各コースの教育内容の素案を検討するための集中的なワークショップを実施
- コースの教育目標を設定(出口論の明確化)
- コースの授業科目の整理統合と新科目の設定

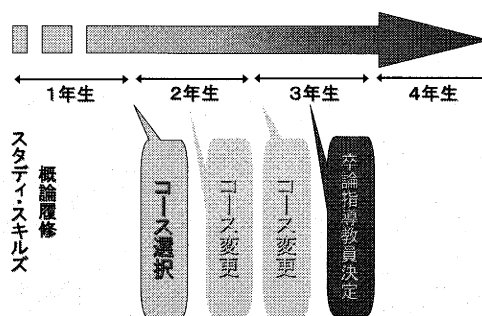
複数コース制のプログラムとして性格

Ready-made

- ▶ 個々の科目を組み立てる自由度の少なさ
- ▶ コースを選択できる自由度でカバー

Order-made

コース教育の流れ



初年次教育の枠組みづくり

初年次第1期における

- 『スタディ・スキルズ(大学学習法)』の導入
- 『情報処理演習』によるSS支援
- 『地域交流サテライト実習』の開講
- 各コース概論の開講

SMARt 計画

- Skill スキル
『スタディ・スキルズ』『情報処理演習』
+
- Motivation モチベーション
『地域交流サテライト実習』『コース概論』
||
- Art 専門技術教育 へのソフト・ランディング

科目メニュー 1年生1学期 まずは、ウォーミング・アップから

必修科目

- 『スタディ・スキルズA3』
- 情報処理演習
- 生産環境科学概論 I
- 生産環境科学概論 II

選択必修科目


- 地域交流サテライト実習

専修コースにこだわらず幅広く勉強


スタディ・スキルズ A3

一人前の大学生になるために

基本的な学習技術(スキル)を理解、会得し、
高校生までの受け身の学習(生徒)から、
自らが率先する学習(学生)へのステップ・アップをお手伝い



「プレゼン」だってこのとおり




「情報処理演習」タイアップ


地域交流サテライト実習

君たちが学び、そして研究すべきことは何？

地域における農林業の実態、例えば
最先端の農林業・環境保全技術や農林業の危機を
現地レポートすることで、やりたいこと探しをサポート

トンボ公園の見学





発見が学びの衝動に

科目メニュー 1年生2学期 コースを視野にステップ・アップ

必修科目

- 測量学

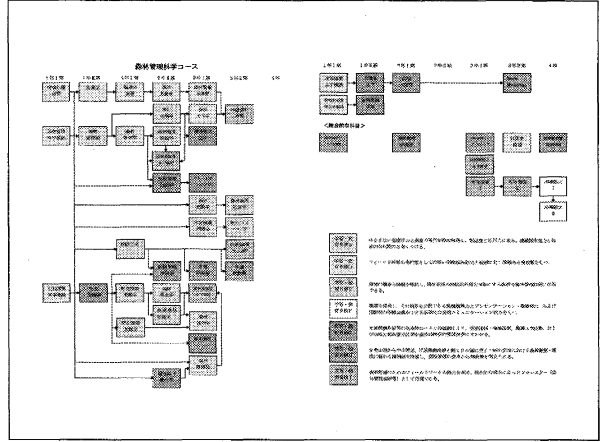
学科共通性の高い科目

- 食料環境工学
- 水環境工学
- 森林資源論
- 保全生態学

大学でやりたいことは何なのかじっくり考える

「学習・教育目標」ベースのカリキュラム

- 学習・教育目標B** ゆるぎない基礎学力と高度の専門知識を修得し、創造性と応用力に富み、問題解決能力と総合的な判断力を身につける。
- 学習・教育目標C** フィールド科学の専門家としての高い問題解決能力と技術に対し情報ある倫理観をもつ。
- 学習・教育目標D** 森林の構造と機能を理解し、森林資源の持続的利用を可能にする森林生態系管理技術に応用できる。
- 学習・教育目標E** 課題を探索し、その結果を公開できる論理展開力とプレゼンテーション・論議能力、および国際間の情報交換ができる基礎的な英語コミュニケーション能力をもつ。
- 学習・教育目標F** 生産環境科学科の他専修コースとの連携により、情報通信・機械技術、農業土木技術、および地域生態系復元技術を森林の持続的管理技術に生かせる。
- 学習・教育目標G** 多量山地から中山間地、平地農地帯を経て日本海に至る一連の流域における森林資源・環境に係わる諸問題を理解し、流域管理の視点から解決策を考えられる。
- 学習・教育目標H** 森林管理のためのフィールドワークの能力を高め、総合的な視点に立ったフォレストナー（森林管理技術者）として活躍できる。



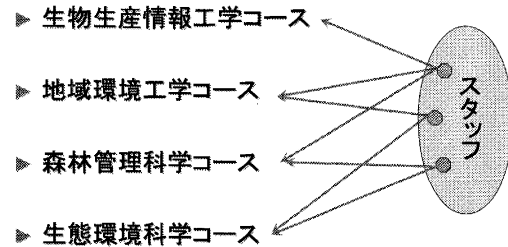
複数コース教育を支える組織

- 科内会議**
- ▶ **コース会議**
 - ▶ **コース主任会議**
 - ▶ **戦略会議**
- 教育プログラム検討委員会**
学科広報委員会
外部評価運営委員会

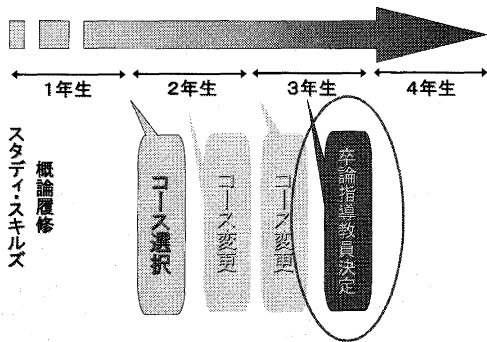
教員はコースに属さない

コースって何？

コースは皆さんが選択する学習プログラム



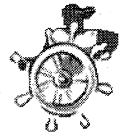
コース教育の流れ



コース会議の役割

- カリキュラムの点検、改善
- 授業内容やシラバスの点検
- 関連各教科の成績評価・確認
- 学習・教育目標達成度の評価
- プログラム修了(卒業)の判定

科目の属人性を排除



授業公開

授業公開の目的は2つ

- ▶ピアレビューによる教員の授業能力向上
- ▶授業内容の確認, 調整

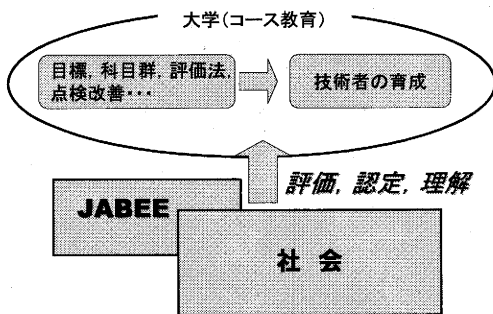
授業公開は2002年度に実施した学科FDを端緒
2003年度以降の授業公開支援

- 「公開授業科目一覧」「授業参観の手引き」配信
- 「ミニ公開授業」の実施
- 「授業参観記録」を参観者から授業者に報告
- 「教育関連評価一覧」にまとめ, 開示

外部評価

- ▶コース毎3~5名の外部評価委員を農学部長が委嘱
- Ex. 森林管理科学コースでは,
 - ▶県・国の関係機関から2名
 - ▶森林組合・森林所有者から1名
 - ▶NPO団体から1名, および
 - ▶企業・技術士会から1名 の計5名
- 委員は, それぞれの専門の立場からみて
- ▶学習・教育目標, カリキュラム, 各科目の内容
- ▶修了(予定)学生のレベル
- が社会的に妥当かどうかについて, 関係冊子や
卒論発表会での修了予定学生の発表内容,
から, それぞれ評価

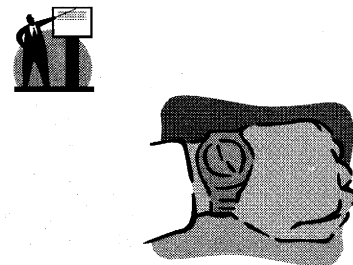
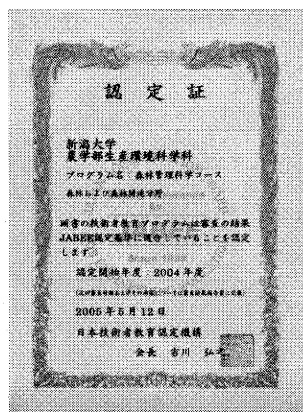
コース教育と 「技術者教育プログラム」



2004年

地域環境工学コース
森林管理科学コース

JABEEによる
「技術者教育プログラム」
認定審査受審



資料

生産環境科学科の進路状況

平成17年3月卒業生 54名

(公務員) 14名
 国交省北陸地方整備局、林野庁東北森林管理局、自衛隊新潟県庁(4名)、新潟県庁非常勤(2名)、山形県庁非常勤(1名)、富山県警察、横浜市消防局、江南市役所、那須塩原市役所、

(組合・団体) 4名
 JA新潟県本部、佐波伊勢崎農協、みどりの農協、淡陽信用組合

(民間企業) 15名
 (株)PLANT、(株)柳澤材木店、(株)ウイング、(株)ヤマウラ、日本食研(株)、(株)シーシージャパン、藤村ヒューム管(株)、日本海コンサルタント、(株)栃木銀行、オリックスレンテック(株)、ヤシマ工業(株)、日本環境(株)、アースサポート(株)、大塚製薬工業(株)、秋田高原フード(有)

(大学) 1名
 新潟大学(13名)、北海道大学、筑波大学、神戸大学

就職試験に向かって

○カリキュラムの整備が進む △学科の教員が減少する

○就職支援体制の整備が進む △専門的スタッフが少ない

○就職状況が好転しつつある △公共事業が減少している

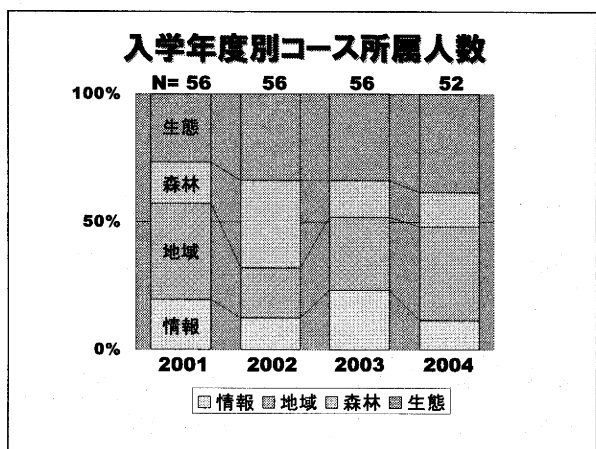
↓

○募集情報をよくチェックする
 ○先輩がいる企業は有力だ
 ○面接は度胸試しだと割り切る
 ○公務員試験は教養試験で差がつく

!!ねばり強く頑張ろう!!

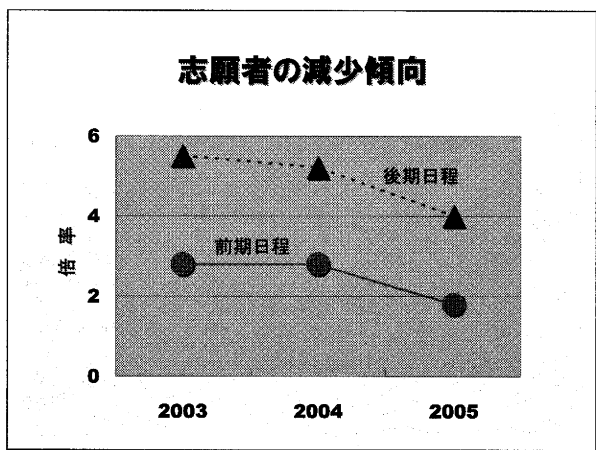
今後の課題

- カリキュラムの整備
- 学科教員の減少



今後の課題

- カリキュラムの整備
- 学科教員の減少
- 学科志望者減少



**2001年度 農学部
教育組織改組の目的**

- 社会的要請に対応した教育体系の構築
- 新しい教員組織の構築
- 新しい教育システムの構築

**〇〇〇〇年度
教育組織改組の目的**

- 社会的要請に対応した教育体系の構築
- 新しい教員組織の構築
- 新しい教育システムの構築

われわれは、

教育プログラムと

共に進化し続けられるのか……